

令和4年度 第3学年入学者選抜学力試験問題

一般科目

国語

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
- 2 問題用紙は10ページで、解答用紙は2ページあります。試験開始の合図があってから確かめなさい。
- 3 監督者の指示に従い、解答用紙の各ページに受験番号を算用数字で記入しなさい。氏名を書いてはいけません。
- 4 文字などの印刷に不鮮明なところがあった場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 5 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。ただし、「採点欄」「得点欄」に記入してはいけません。
- 6 問題用紙の余白は下書きとして利用してかまいません。
- 7 試験終了後、配付された問題用紙は持ち帰りなさい。

問題用紙 (国語)

I 次の文章は、野家啓一「3・11以後の科学と倫理」の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。なお、本文中の語句の右肩の*は、文章の最後にある(注)の記号である。

最後の第三ステージは、二〇世紀半ば以降に始まる「トランス・サイエンス」の時代である。二つの世界大戦における兵器開発に触発されて、この時期は科学と技術が融合し、科学理論を基盤とした技術開発、いわゆる「科学技術」開発が国家主導で推し進められる。その結果、「巨大科学 (Big Science)」と化した科学技術は、予算規模からも人材動員からも社会的影響力が著しく強まり、他面で社会的リスクもそれに比例して増大する。原爆投下、原発事故、葉害、水俣病をはじめとする公害、環境破壊、パンデミックなど、科学技術がもたらした負の側面は枚挙にいとまのないほどであり、それと表裏一体の事柄として「科学者の社会的責任」が問われるに至った。

a、この第三ステージは「社会事業としての科学」の時代であり、科学技術政策を通してその「体制化」と国家管理(かつては「科学技術庁」という役所があった)が急速に進んだ時期とすることができ。

科学の展開が第三ステージに入るとつれて、基礎科学者といえども、象牙の塔にこもってユイガドクソンを決めこむことはできなくなる。否応なく、社会とのインターフェースの場に連れ出され、政治や経済の動向と無縁ではいられなくなるのである。環境問題や原発問題はその典型といえることができる。そうした現代社会における科学技術のあり方を、マンハッタン計画にも加わった核物理学者アルヴィン・ワインバーグは「トランス・サイエンス (領域横断的科学)」と名づけた。現代の科学は個別の専門領域のなかで自己完結することはできず、好むと好まざるとにかかわらず、領域を超えてしまうという意味である。彼自身のトランス・サイエンスの定義は、以下のようなものである。

「科学または技術と社会との相互作用の過程で生ずる係争点の多くは—— b、技術の有害な副作用、あるいは社会問題を科学の手続きで処理しようとする試み——科学に問いかけることはできるが、科学によつて答えることのできない問題に対する回答を未決のままにしておく。私はこれらの諸問題に対してトランス・サイエンス的という術語を提案する。それというものも、それらは認識論的に言えば事実に関する問題であり、科学の言葉でのべることができのだが、科学によつては答えられないからである。つまり、それらの問題は科学を超え出ているのである。」

少々わかりにくい言い回しだが、トランス・サイエンスとは要するに「科学に問いかけることはできるが、科学によつて答えることのできない問題」のことである。環境問題や原発問題を見ればわかるように、答えようとすれば直ちに政治や経済がからまりあつてきて、科学の領域を超え出してしまうからである。

トランス・サイエンスの問題の特徴は何かと言えば、事実と価値がコウサクして明確に切り分けがたい、ということである。これまでは事実認識は自然科学の仕事であり、価値判断は人文・社会科学の役目、という一定の棲み分けがなされてきた。

c、トランス・サイエンスの問題については、両者を分離することができないか、きわめて困難である。先に「信頼の危機」に関連して言及したBSE事件の際には、科学者委員会の事実判断のなかに、イギリスの畜産業界への配慮という価値判断が暗黙の裡に働いて

問題用紙 (国語)

いたことが後に明らかになっている。地球温暖化や生物多様性（絶滅危惧種）の問題を引き合いに出すまでもなく、科学と政治、経済、文化、社会、倫理などの諸領域が重層的に覆い合っているグレーゾーンこそ、今日のわれわれが直面しているキツキンの課題なのである。

このようなグレーゾーンの存在を、ラベッツは「ポスト・ノーマルサイエンス」という概念で言い表している。これは現代の科学研究が科学者コミュニティ内部でのパラダイムに従ったノーマルサイエンス（通常科学）に留まらず、新たな社会的課題に直面しているような問題状況を指している。具体的には「グローバルな気候変動、環境ホルモン、核廃棄物の処分、種の絶滅といった問題」のことである。これらの問題については、専門家の知識が最良の解決を与える、というこれまでの前提は維持できない。科学の専門家といえども社会問題については素人にすぎないからである。それゆえラベッツは、専門家以外の市民参加の必要性を強調し、「拡大ピア・コミュニティ」の形成が急務だと主張する。われわれはすでに「解決に科学は必要だが、科学だけでは十分ではない、新しい政策の時代に生きている」からである。

現代の科学技術の特徴づける「トランス・サイエンス」や「ポスト・ノーマルサイエンス」という概念は、ドイツの社会学者ウルリヒ・ベックが提起した「リスク社会」と表裏一体とも言うべき密接なかわりを持っている。ベックの名著『リスク社会』（邦訳題は『危険社会』）は、旧ソ連のチェルノブイリ原発事故が生じた一九八六年に刊行されたこともあって、ヨーロッパ各国ではベストセラーとなり、ドイツではギムナジウムの社会科の副読本としても使われている。ベックによるリスク社会の定義は以下のようなものである。

「近代が発展するにつれ富の社会的生産と並行してリスクが社会的に生産されるようになる。貧困社会においては富の分配問題とそれをめぐる争いが存在した。リスク社会ではこれに加えて次のような問題とそれをめぐる争いが発生する。つまり科学技術がリスクを造り出してしまうというリスクの生産の問題、そのようなリスクに該当するのは何かというリスクの定義の問題、そしてこのリスクがどのように分配されているかというリスクの分配の問題である。」

ベックによれば、「近代」は二つのフェーズに分かれる。第一の近代は産業社会であり、ここでは貧富の格差が最大の問題であり、政府の最優先課題は税制や生活保護などを通じて行う「富の再分配」にあった。それに対して、第二の近代（再帰的近代）では、富の源泉であった科学技術がリスクをもたらす源泉であり、今度はそのリスクをどのように公平に分配するのが、最大の政策課題となる。このように巨大科学技術による社会の自己加害が明らかになり、「リスクの分配」が主要なトピックとなる社会こそ「リスク社会」なのである。

d、「富の問題が上方への集中であるのに対して、リスクの場合は下方へ集中している」のだから始末が悪い。

このようなりスク社会の現実をわれわれの前に突きつけたのは、東京電力福島第一原子力発電所の全電源喪失による過酷事故であった。これは安全性確保（科学）とコスト負担（経済）のはざままで起こった、まさにトランス・サイエンス的な事故と言ってよい。しかもこの事故は、事後処理の遅滞と情報伝達の不

問題用紙 (国語)

適切さも相まって、福島の地に最悪の環境破壊をもたらした。まずそれは、大気、土壌、水、食料(穀類、魚介類)を放射能に晒すことによつて、人間や家畜、その他の生物の生存条件に壊滅的な被害をもたらした。すなわち、「生命圏」を汚染し破壊したのである。次にそれは住民の「生活圏」を破壊した。

、人々の故郷、コミュニティ、地域文化を根こそぎ奪つたのである。日本はこの原発事故によつて、それだけでなくとも狭い国土の一部を、放射能の半減期を考えれば半永久的に失つたことになる。

しかも、リスクの地域間・世代間の公平な分配という観点からすれば、この事故があらわにしたのは、「受益圏」と「受苦圏」のあいだの地域格差であつた。すなわち東京電力の原発で発電された電力は首都圏の生活をウルオし、地元福島には原発のリスクのみが残されたのである。もう一つ、地域格差とともに世代間格差についても言及しておかねばならない。原発による発電の恩恵を受けるのは現存世代であるが、放射性廃棄物(核のゴミ)の処分と安全管理は未来世代へ丸投げされているのである。少なくとも現存世代は未来世代の生存可能性に対して責任をもたねばならない。それをキソンするような行為は、倫理的に非難されるべきである。これを「世代間倫理 (Intergenerational ethics)」という。だとすれば、3・11以後の科学倫理は、この世代間倫理を一つの柱とせねばならないのである。

(問題作成の都合上、原文の一部を省略した。)

(注) ○第三ステージⅡ著者による科学の歴史的展開のプロセス。第一ステージは一六世紀半ばから一七世紀終わりにかけて、近代科学の方法が確立された科学革命の時期、第二ステージは十九世紀半ばの科学の専門分化の時期である。○インターフェースⅡ接点。○マンハッタン計画Ⅱ第二次大戦中のアメリカで、秘密裏に進められた原子爆弾製造計画。○アルヴィン・ワインバーグⅡ一九一五〜二〇〇六。アメリカの核物理学者。○BSE事件Ⅱ一九八六年に英国でBSE(牛に発生する、脳の変性・破壊を主徴とする疾患。牛海綿状脳症)が発見された。英国政府は専門科学者からなる委員会の報告書に基づき、ヒトには感染しないと安全宣言を行い、予防措置を施さなかつた。ところが、BSE感染牛を食べたことが原因と考えられる新型の人の脳症(変異型クロイツフェルト・ヤコブ病)の例が次々と見つかり、ついに一九九六年、英国政府はBSEがヒトにも感染することを公式に発表せざるを得なくなった。「信頼の危機」とはこのときに使われた言葉であり、政府と科学者に対する二重の不信感を言い表している。○ラベッツⅡジェローム・ラベッツ(一九二九〜)。イギリスの科学史・科学哲学の研究者。○パラダイムⅡもの見方や考え方の枠組み。○ピアⅡ同じ地位にある者。同僚。仲間。○ウルリヒ・ベックⅡ一九四四〜二〇一五。ドイツの社会学者。○ギムナジウムⅡドイツの高等学校。九年制の中等教育機関。○フェーズⅡ局面。○再帰的近代Ⅱ近代社会が自らをさらに近代化していく時代。

問題用紙 (国語)

問一 傍線部ア～オのカタカナを漢字に直せ(楷書^{かいしよ}でていねいに書くこと)。

問二 空欄

a

く

e

に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次の1～5の中から一つずつ選び、番号で答えよ(一つの語は一つの箇所にはか入らない)。

- 1 それゆえ
- 2 だが
- 3 しかも
- 4 つまり
- 5 たとえば

問三 傍線部A『社会事業としての科学』の時代』の説明として適当でないものを、次の1～5の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 科学と技術が融合し、科学理論を基盤とした技術開発、いわゆる「科学技術」開発が推し進められる。
- 2 科学技術は「巨大科学 (Big Science)」と化し、予算規模からも人材動員からも社会的影響力が著しく強まる。
- 3 科学技術による社会的リスクが増大し、それと表裏一体の事柄として「科学者の社会的責任」が問われるに至る。
- 4 原発事故、薬害、水俣病をはじめとする公害、環境破壊、パンデミックなど、科学技術が多くの方の側面をもたらした。
- 5 科学技術政策を通して、科学技術の「体制化」と国家管理が急速に進んだ。

問四 傍線部B「トランス・サイエンス」の説明として最も適当なものを、次の1～5の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 現代社会における科学や技術が関わる問題の解決に、科学は従来の専門領域のなかで答えを出すことができないので、専門領域を超えた新領域での研究が求められているということ。
- 2 科学や技術が生み出した現代の社会問題を科学だけで解決するのは難しく、科学者は専門領域にとどまらず、政治や経済など関係する諸領域のことも知らなければ答えが出せないということ。
- 3 科学や技術と社会との相互作用で生じる社会問題の解決策を科学が求められた場合、科学は事実に関する回答はできるが、政治や経済がからんでくる場合には市民が答えるべきであるということ。
- 4 科学や技術が関わる社会問題に対して、その解決策を科学で答えようとしても、政治や経済、文化や倫理などの諸領域が関係してくるので、科学だけでは答えが出せないということ。
- 5 科学や技術が生み出した社会問題は科学の専門領域を超えているので科学には答えが出せず、政治や経済、文化や倫理などの諸領域によって解決策を見い出すしかないということ。

問題用紙 (国語)

問五 傍線部 C 「表裏一体とも言うべき密接なかかわりを持つている」とあるが、それはなぜか。本文中の語句を用いて四五字以内 (句読点・括弧類も字数に数える) で答えよ。

問六 傍線部 D 「このようなリスク社会の現実」とはどういうことか。本文中の語句を用いて五〇字以内 (句読点・括弧類も字数に数える) で答えよ。

(以下余白)

問題用紙 (国語)

II 次の文章は、末木文美士「災害の思想史」の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。な

お、本文中の〈白文〉は出題者が挿入したものである。また、語句の右肩の*は、文章の最後にある(注)の記号である。

近世になると、武士を中心とした知識人の世界では儒教が主流を占めるようになる。儒教では、天譴説のように天を超越的に立てる場合もあり、そのような見方は近世になってもみられる。とくに大名など支配者のジセイの意味をもっていた。しかし、近世に広まった朱子学などでは、超越的な天を立てず、世界をそれ自体として内在的な原理で発展展開するものと考えられる。

このような朱子学的な立場では、自然と人間とは切り離されたものではなく、人間も自然のなかの一部と考えられるのが一般であった。

* 尊徳は、小田原(神奈川県)や下野(栃木県)で冷害などによって荒廃した農村のフッコウに成功したが、その根本の思想は、「天理」と「人道」を対立させながらも、相補的とみていることである。「夫世界は施転してやまず、寒往けば暑来り、暑往けば寒来り、夜明れば昼となり、昼になれば夜となり、又万物生ずれば滅し、滅すれば生ず」(『二宮翁夜話』)というような自然の摂理を「天理」とよび、それに対して、「人道は、是と異なり」(同)と、「天理」と「人道」をはつきり区別する。人は羽毛も鱗もなく、裸で生れるのであるから、「家がなければ雨露が凌がれず、衣服がなければ寒暑が凌がれず、爰に於て、人道と云物を立て、米を善とし、莠を悪とし、家を造るを善とし、破るを悪とす、皆人の為に立たる道なり」(同)とされるのである。それゆえ、「天理より見る時は善悪はなし」(同)であるが、人道を立てるときに善悪が生ずることになる。

だが、「人道」は「天理」とまったく相反するものではない。「人道はその天理に順といへども、其内に区別をなし、稗莠を悪とし、米麦を善とするが如き、皆人身に便利なるを善とし、不便なるを悪となす」(同)ものである。このように、「人道」は「天理」と異なり、善悪を立てるものではあるが、「天理」を離れてはありえない。

尊徳は、このような思想をもって荒廃した農業の立て直しを図って成功する。災害に対して合理的に対処する道を切り開く思想といえる。

尊徳が活動したのは、それほど自然がきびしくない関東地方であったので、このような調和的な発想で立て直すことが可能であった。それに対して、自然がきびしく、しばしば飢饉に見舞われた東北地方では、そのような自然観では対処しきれなかった。東北のきびしい自然のなかで、人為を否定して自然に帰ることで乗り越えようとしたのが、安藤昌益(一七〇三—一六二二)であった。

昌益は若い頃、災害に対して天譴説の立場を取っていた。暦学を学んだときのノートである『暦ノ大意』では、「妖怪八国政ノ私ニ出デテ、天、是レヲ示ス。民八天真ノ舎ナリ。国政過ツ則ハ、民、之レガ為ニ苦シム。民苦シム則ハ、其ノ憂ヒ、天神・地祇ニ応フ」といっている。国政が誤り、民が苦しむとき、その憂いに感應して天神・地祇が妖怪(異変)を示すというのである。

問題用紙 (国語)

自己の思想を確立してからの昌益は、天神・地祇をバイカイとせず、自然の自己運動として世界が展開すると考えるようになる。『自然真営道』（三巻本）序では、「自然ト言フハ、五行ノ尊号ナリ」と、その「自然」は五行であるという。

その五行が進退するところにおのずから秩序が生まれる。「自り然ル真ノ営ム所ニシテ、転定（昌益独自の書き方で、天地のこと）・人倫・鳥獸・虫・魚・草・木トナル所以ナリ」（同）といわれるように、その秩序は、宇宙的な「転定」から、人間がかかわる鳥獸草木などの環境世界、そして、人間世界にまで一貫するものである。その点で、昌益は世界と人間の一貫性を認める朱子学的な世界観に近い。

しかし、そこで人倫とされるものは、ホウケン的な身分差別ではない。昌益はテツテイ的に農耕の現場から人間社会の支配関係を否定し、「直耕」、すなわち直接的な農業生産に従事することを理想化する。それなのに、「不耕」の者たちが根本の自然のあり方に逆らつて身分秩序をつくり、支配収奪するところに人びとの不幸がはじまるというのである。

このような見方から、稿本『自然真営道』私法神書巻下では、「奇怪・転変ヲ以テ神ノ靈験ト為スコト、甚ダ失レリ」と、天変怪異現象を神の靈験とすることを否定している。また、菅原道真が雷神となつて人を殺したという説を批判し、「天雷神ノ偶々落チテ人ヲ殺スコト之レ有り、天雷之レヲ殺スニ非ズ、人ノ居所・行ク所、雷ノ落ツルニ遇ヒテ自り死スル者ナリ」と、落雷を神の所為ではなく、自然現象にたま遭遇しただけだとしている。

しかし、昌益は災害を純然たる自然現象とみているわけではなく、人間の善悪が転定（天地）の運行に影響を与えたとする。『統道真伝』には以下のようにいわれている。

人ノ氣ハ呼氣ヨリ出デテ転定ノ吸氣ト為ル、転定ノ運氣コレナリ。此ノ故二人ノ正氣ナル則ハ転定ノ運氣モ正氣ニシテ、大風・妄雨ノ不正ノ氣行ハ行ハレズ、万物ノ生能キナリ。人ノ和喜ノ氣ナル則ハ転定ノ運氣和順ニシテ藥物ヲ生ジ、珍悦ナルコト人ニ到ル。人ノ常ニ妄欲心ニシテ、不幸ニシテ貪リ、^{たぶらか}誑シ、悪念盛ンナル則ハ其ノ悪心・邪氣常ニ呼息ヨリ出デテ転定ノ運氣ヲ汚ス。其ノ邪氣積リテ運氣終ニ大激ス。

人間の心の正悪に従つて転定（天地）の運氣が影響され、和順であったり、激動したりするというのである。これは、人間の行為の善悪が最終的に自然の和順や災害をもたらすという点で天譴説に近いが、天という超越的なものの意志をいれずに、直接自然が人間の行為に反応すると見る点で異なっている。

このように昌益は自然と人間とを統合的に見て災害を考える立場をとるが、必ずしもそれが知識人に広く行なわれていたというわけではない。そもそも昌益の『暦ノ大意』は、西川如見の天譴説批判を再批判するものであった。昌益にあつては、自然と人間とは切り離すことはできないものであり、自然に反した人間生活を自然に戻さなければならぬという強い倫理的な志向があつた。それが天譴説、もしくはそれに近い説を採らせたゆえんであつたと考えられる。

近世の知識人の多くは、もつと醒めた目で天災をみていたように思われる。近世に広く行なわれた百科

問題用紙(国語)

事典である寺島良安の『和漢三才図会』(一七二二)の巻五五の「地震」の項目は、最初に「震者動也、怒也」と定義して、「陽、陰下に伏し、陰に迫らる、故に外する能はず、以て地動に至る」(原漢文)と簡略に説明している。さらに、諸書を引用した後、「按ずるに、地中に窺あり、蜂の窠の如く(白文)按地中有窺、如蜂窠」、水潜り、陽気常に入出入す。其の陰陽相和し、宜を得たるときは則ち常と為す。如し陽渋滞して出づるを得ず、歳月を積むときは則ち地脹れ水縮む(同)として、それが原因で地震が起るとしている。すなわち、人間の行為とは関係ない自然現象として、いわば科学的な説明を与えている。このように、近世には客観的、科学的、合理的な災害観もかなり広まってきていた。

(問題作成の都合上、原文の一部を省略した。)

(注) ○天譴説||自然災害を天罰であるとする考え方。 ○朱子学||南宋の朱熹(一一三〇〜一二〇〇)が大成した儒学の体系。 ○尊徳||二宮尊徳(一七八七〜一八五六)。江戸後期の農政家。通称、金次郎。 ○旋転||くるくるとめぐること。くるくるまわすこと。 ○莠||水田に生えて稲を害する雑草。 ○稗||イネ科の一年草。水田などに稲の雑草として混じる。 ○安藤昌益||江戸中期の医者・社会思想家。著書に『自然真営道』『統道真伝』など。 ○曆学||天体の運行や曆術に関する学問。 ○天真ノ舎||自然のままが宿る所。 ○地祇||地の神。 ○五行||天地の間に広がり、巡り動いてやむことのない五つの元素。木・火・土・金・水。 ○稿本||手書きの本。 ○菅原道真||八四五〜九〇三。平安前期の貴族・学者。 ○運氣||五運(五行の運行)六氣(天地間の六種の気。陰・陽・風・雨・晦・明。または寒・暑・燥・湿・風・火)のこと。 ○西川如見||一六四八〜一七二四。江戸中期の天文・地理学者。 ○寺島良安||生没年未詳。江戸中期の漢方医。和漢の学に精通し、『和漢三才図会』百五巻を著述した。 ○陽、陰下に:||陰陽は中国の易学でいう、相反する性質をもつ二種の気。万物の化成はこの二気の消長によるとする。 ○陰に迫らる||陰におさえつけられている。

(以下余白)

問題用紙 (国語)

問一 傍線部アくオのカタカナを漢字に直せ(楷書^{かいしよ}でいいねいに書くこと)。

問二 傍線部A 『人道』は『天理』と異なり、善悪を立てるものではあるが、『天理』を離れてはありえない」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の1く5の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 人間が自然に対して善悪を立てるのは、自分たちの便不便にもとづいて行っていることであり、自然の摂理はそのこととは関係なく運行しているということ。
- 2 人間も自然の摂理の中でその一部として生きているので、自分たちの便不便にもとづいて善悪を立てているが、自然の摂理には結局従うしかないということ。
- 3 人間が自分たちにとつての便不便で自然を見るときに善悪が生じるので、善悪といってもその自然の摂理を人間が変えることはできないということ。
- 4 人間は自然の摂理に善悪を立てるけれども、それは人間の便不便にすぎず、自然はそれとは関係なく人間にとつての善や悪をもたらしているということ。
- 5 人間は自分たちの便不便によって自然に対して善悪を立てているが、それはあくまでも人間が自然の摂理を認め、それに従う中で行っているということ。

問三

① 傍線部Bを口語訳せよ。

② 波線部a「出デ」、b「ナリ」、c「能キ」の文法的説明として、次表の空欄1く7に入れるのに最も適当なものを、それぞれ後の選択肢の中から一つずつ選び、記号で答えよ(同じ選択肢を何度用いてもよい)。

| 語 | 品詞 | 活用形 | 意味 |
|----|----|-----|----|
| 出デ | 1 | 2 | 5 |
| ナリ | 3 | 4 | |
| 能キ | 6 | 7 | |

(品詞) ア 名詞 イ 動詞 ウ 形容詞 エ 形容動詞 オ 副詞 カ 連体詞

キ 接続詞 ク 感動詞 ケ 助動詞 コ 助詞

(活用形) サ 未然形 シ 連用形 ス 終止形 セ 連体形 ソ 已然形 タ 命令形

(意味) チ 自発 ツ 打消 テ 推量 ト 受身 ナ 尊敬
ニ 完了 ヌ 断定 ネ 伝聞 ノ 使役 ハ 可能

③ 本文中の訓読に従い、波線部dの白文に返り点・送りがなを付けよ(送りがなはカタカナで記せ)。

問題用紙（国語）

問四 傍線部C「落雷を神の所為ではなく、自然現象にたまたま遭遇しただけだとしている」のはなぜか。本文中の語句を用いて二五字以内（句読点・括弧類も字数に数える）で答えよ。

問五 傍線部D「自然と人間とを統合的に見て災害を考える」とはどういうことか。本文中の語句を用いて六〇字以内（句読点・括弧類も字数に数える）で答えよ。

問六 次の1〜5について、本文の内容に合致するものには○、合致しないものには×をつけよ。

- 1 二宮尊徳は「天理」と「人道」を対立させながらも相補的とみており、冷害などによる農業の荒廃も善悪のない自然の摂理によるものとして、災害への合理的な対処の道を切り開いた。
- 2 尊徳が調和的な発想で荒廃した農業を立て直すことができたのは関東地方の自然がそれほどきびしくなかったからで、自然のきびしい東北では安藤昌益が災害に対して天譴説の立場を取った。
- 3 昌益は、宇宙の天地から人間世界にまで一貫した秩序を認めており、自然と人間とを切り離して考えることができなかったが、災害は人間の行為の善悪によらない自然現象であると考えていた。
- 4 「直耕」、すなわち直接的な農業生産に従事することを理想化する昌益には、自然に反した人間生活を自然に戻さなければならぬという強い倫理的な志向があった。
- 5 寺島良安の陰陽の運動による「地震」の説明は、人間の行為とは関係ない自然現象としての科学的な説明であり、客観的、科学的、合理的な災害観の広がりを示すものである。

（以下余白）